

歎の花の咲く頃、お島は惜まれながら出代って行った。

その翌日からは、お島は紺緋りの筒袖に、手甲懸、脛巾をつけた凜々しい姿を、同じやうな風姿をした村の娘達に交へて野良仕事に出掛けた。時々夕方山からの帰りには木苺の枝などを折って来て、門口まで来て坊ちゃんにそつと渡して行ったりした。

その頃から、その村には曾て無かつた赤痢が入って来て、遠い山裾にある避病舎は、急に建増しをするくらゐ日々に新らしい患者が送られて行つた。

例の通り、畑に出来た青物を持って、奥様を訪ねて来て、夕食を御馳走になつたりして、奥様から嫁入りの日をきかれると、「秋でも仕舞つてからで御座るませう……」と、他人事のやうに快活に笑つて帰つて行つたお島は、思ひもよらず、その翌日赤痢に罹つて山裾に増築された荒建ての避病舎へ送られて行つた。

身体が丈夫なだけ、病勢も急激にきたと見えたが、気丈なお島は、寝ながら枕元に灯つた空箱の上の蠟燭の裸火をたよりに、自から半紙を裂いて、下痢する度に紙縊りを一本づつ縊つて、枕元へ置いて下痢の数を数へてゐたそうだが、おひく／＼激しくなる下痢に、とう／＼紙縊りを縊る力も尽きて、その暁にあつてなく死んだ。

「お島は、丁度厄年でした」

奥様は或る時しみじみ旦那様に言つた。

嶋雲智清善女、これがお島が死しての名である。法恩寺の墓

所の枇杷の木の下に、百姓の墓にしては立派すぎる墓面に刻られた文字、旦那様は妙な癖から、或日墓面から書取つたのが、手帳の片隅に印されてある。
(大正6年・曲水214)

屠 蘇

私が七つ八つの頃父が一切酒を断つて以来、私の家では、三月の雛壇の緋毛氈には無くてかなはぬ白酒さへ、許されなかつた。無論元日の屠蘇も廃されて、毎年、薬種屋の御歳暮に呉れる赤い三角の袋は、そのまゝ、淋しく捨てられてしまふのであつた。

この一二年私が俳句を始めてからは、何事によらず一家の年中行事は、なるべく行ふやうに主張したし、母も賛成してくれたししたので、一昨年の大晦日の夜に入つて帰省した私は、翌る元日は屠蘇の一儀も是非復活したいと唱へだした。しかし永い間酒を断つた家に、屠蘇の道具のあらう筈はない。私は、せめて来年からといふ母を無理に促して、屠蘇の道具を求めに更けた大通りへ出た。

幾軒店を探しても、取出して見せる物は、皆瀬戸物へ金ピカで松や鶴を描いた、至つて安直なおめでた尽めの物ばかりで、とても使へた品ぢやあない。母と二人でねらつて来た、古風な鉄の銚子など迎もありはしない。すでに打ち出した寺々の除夜の鐘をき、ながら何処までも探し廻つた末、一時過ぎまでか、つて、やうやうある漆器屋で見つけた黒塗りの一揃、それすら忽ちに父の鑿聲に値しさうな物だったが、詮方なく我慢して求